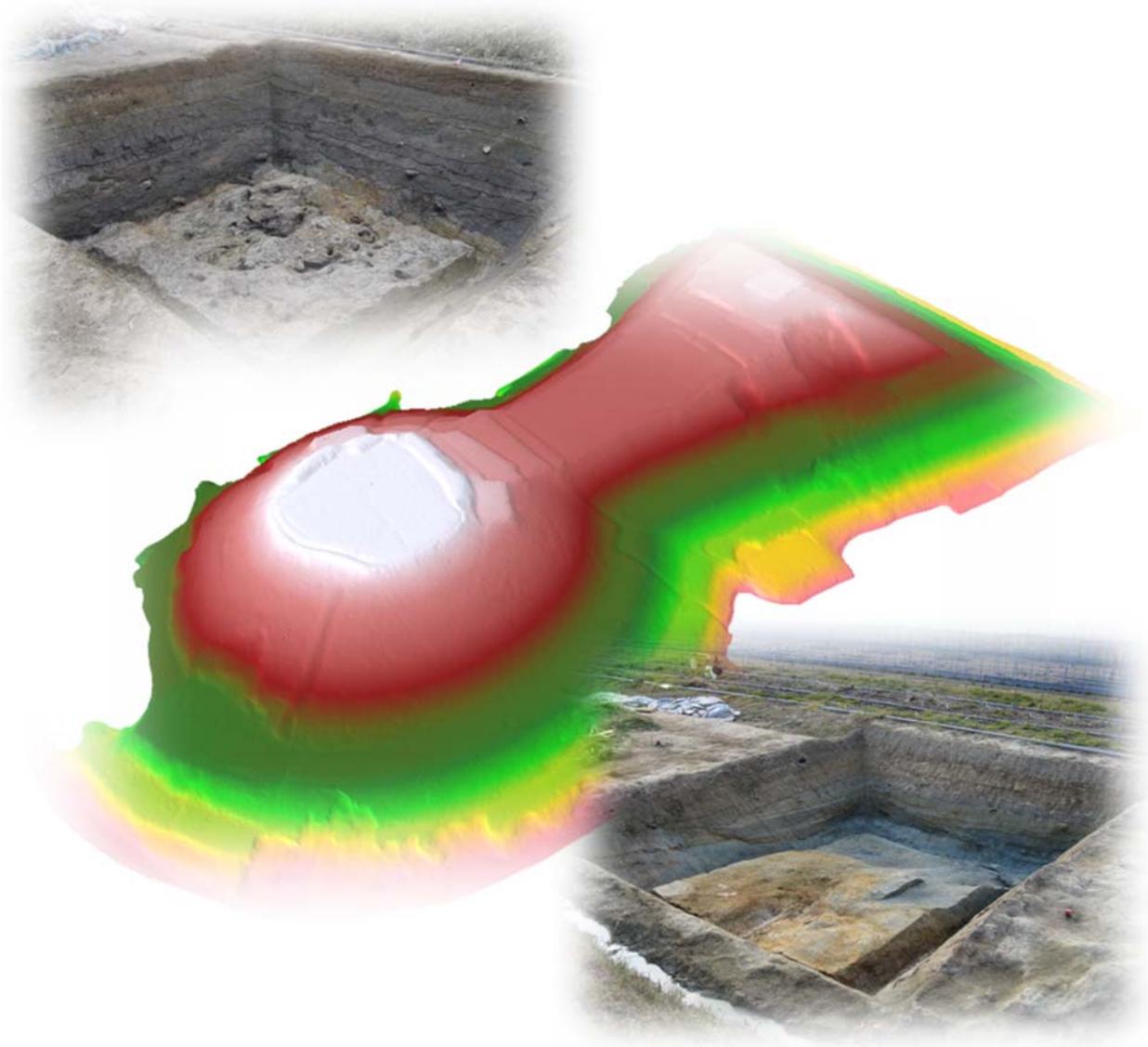


岡山県岡山市新庄下
造山古墳第1次調査
概要報告



2009
岡山大学考古学研究室

はじめに

岡山市新庄下の造山古墳は、日本列島第4位の規模をもつ前方後円墳であるが、これまであまり調査のメスが入れられてこなかった。

岡山大学考古学研究室では、造山古墳の現状をできるかぎり詳細に把握しデータを未来に伝えるとともに、古墳群の保存と活用を図っていくために、2005年度から造山古墳群のデジタル測量を実施し、2008年度から墳端と外部構造を確認するための発掘調査を開始した。

造山古墳は、自由に立ち入って研究を進めることのできる最大の古墳である。しかし、そうした重要な意味をもつ古墳であるからこそ、未来の人々に可能な限り現状を保存して伝えていく責務を私たちは負っている。そのため、私たちは発掘調査を、必要な成果を上げることのできる最小限の範囲にとどめることとした。

2008年度に実施した2つのトレンチの発掘調査は、そうした意図もあり、いずれも後世の改変により古墳築造当時の遺構をとらえることができない結果となった。それでも、今後の調査の方向を示すいくつもの成果を得ることができた。造山古墳の墳端および外部構造を確認するための調査は、2010年度の3次までを計画している。引き続き、古墳の保存を優先させる方向で調査を実施していきたいと考えている。

今回の調査は、科学研究費補助金（基盤研究A）「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」（2008～2011年度）の研究の一環として実施したものである。調査にあたっては、地権者の定廣始生さん、三垣昌弘さん、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会、造山地区町内会（定廣好和会長(当時)）ほか多くの方々にお世話になった。また、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターには調査方法についてのアドバイスや機材の貸与などの協力を得た。土運びなどを援助してくださった方々や、食料などの差し入れをいただいた方々は多数にのぼる。調査を支援してくださった多くの方々に改めてお礼を申し上げたい。

造山古墳第1次発掘調査概要報告

目 次

はじめに	新納 泉 (i)
1. 調査の経過	黒田祐介 (1)
2. 前方部第1トレンチ	
(1) トレンチの概要	石原直美 (3)
(2) 出土遺物	
a. 埴輪	山川美蘭 (5)
b. 後世の土器	服部瑞輝 (7)
3. 後円部第1トレンチ	
(1) トレンチの概要	山田侑生 (8)
(2) 出土遺物	
a. 埴輪	中谷祐実 (13)
b. 弥生土器	井上 涼 (13)
c. 後世の土器	廣田あずさ (18)
d. 木材	水船由貴 (18)
結語	新納 (21)

挿 図

第1図 造山古墳トレンチ位置図 (S=1/2000)	(2)
第2図 前方部第1トレンチ平面図・断面図 (S=1/50)	米村悟史・渡瀬健太 (4)
第3図 前方部第1トレンチ東壁断面図 (S=1/50)	武田有加 (5)
第4図 前方部第1トレンチ出土埴輪 (S=1/3)	
石原・檀野理沙・中谷・服部・廣田・山川・山田	(6)
第5図 前方部第1トレンチ出土中世土器 (S=1/2)	服部・山川 (7)
第6図 後円部第1トレンチ平面図・断面図 (S=1/50)	徳富孔一・宮崎絢子 (9)
第7図 後円部第1トレンチ木材出土状況図・木材立面図 (上層) (S=1/20)	山田 (10)
第8図 後円部第1トレンチ木材出土状況図・木材立面図 (下層) (S=1/20)	山田 (11)
第9図 後円部第1トレンチ被熱遺構平面図 (S=1/20)	徳富 (12)
第10図 後円部第1トレンチ出土埴輪 (1) (S=1/3)	
石原・檀野・中谷・幡中光輔・服部・水船・山田	(14)
第11図 後円部第1トレンチ出土埴輪 (2) (S=1/3)	廣田・水船・山田 (15)
第12図 後円部第1トレンチ出土弥生土器 (1) (S=1/2)	
井上・檀野・中谷・服部・廣田・藤井・水船・山田	(16)
第13図 後円部第1トレンチ出土弥生土器 (2) (S=1/2)	
石原・井上・陶澤真梨子・檀野・中谷・廣田・藤井・山田	(17)
第14図 後円部第1トレンチ出土後世の土器 (S=1/2)	石原・黒田・廣田 (19)
第15図 後円部第1トレンチ出土木材 (S=1/3)	石原・水船 (20)

表

第1表 前方部第1トレンチ土層註記・・・・・・・・・・・・・・・・（5）
 第2表 後円部第1トレンチ土層註記・・・・・・・・・・・・・・・・（12）
 第3表 後円部第1トレンチ被熱遺構土層註記・・・・・・・・・・・・（12）

図 版

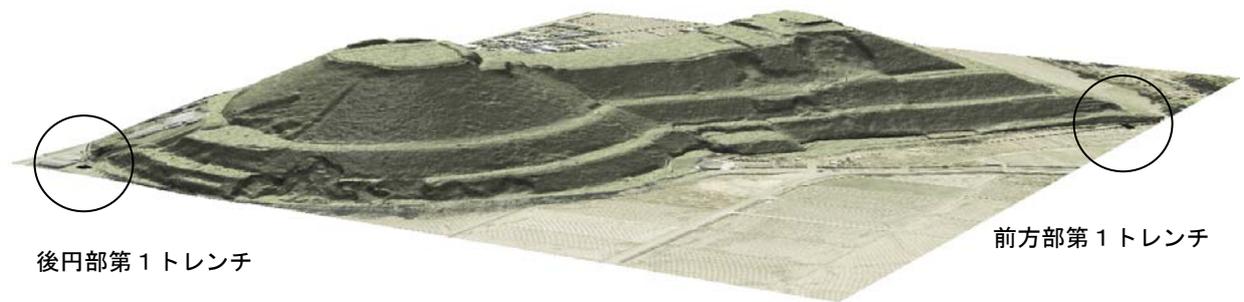
図版1 前方部第1トレンチ
 図版2 後円部第1トレンチ

発掘調査・整理作業参加者

新納泉（調査担当） 石原直美 井田智 井上涼 上杉紗織 圓藤倫久 奥原このみ（前方部第1トレンチ長） 景山佐保子 景山詩織 川合縁（後円部第1トレンチ長） 黒田祐介（学生隊長） 庄政典(有志) 陶澤真梨子 武田有加 檀野理沙 徳富孔一 中谷祐実 中原香織 幡中光輔 服部瑞輝 廣田あずさ 藤井裕也 藤原摩耶 松尾沙矢香 水船由貴 宮崎絢子 森実季 守屋亮(東京大学) 安原貴之 山川美蘭 山田侑生 米村悟史 渡瀬健太

発掘調査参加者所属学年

修士2回生 安原貴之
 修士1回生 中原香織 幡中光輔 藤原摩耶
 学部4回生 井田智 景山佐保子 徳富孔一 藤井裕也
 学部3回生 上杉紗織 圓藤倫久 奥原このみ 川合縁 黒田祐介 松尾沙矢香 守屋亮(東京大学)
 学部2回生 石原直美 井上涼 檀野理沙 中谷祐実 服部瑞輝 廣田あずさ 水船由貴 山川美蘭 山田侑生
 学部1回生 景山詩織 武田有加 宮崎絢子 米村悟史 渡瀬健太



造山古墳3D復原図

1. 調査の経過

2009年3月1日から3月31日までの期間、岡山大学考古学研究室が主体となって調査をおこなった。今年度の調査は、周濠の有無の確認、墳丘長の確認、出土埴輪による年代の把握の3点を目的とし、特に周濠の有無の確認に主眼を置いた。調査区は前方部西側と後円部北側の2ヶ所に設定し、それぞれを前方部第1トレンチ、後円部第1トレンチと呼称した。

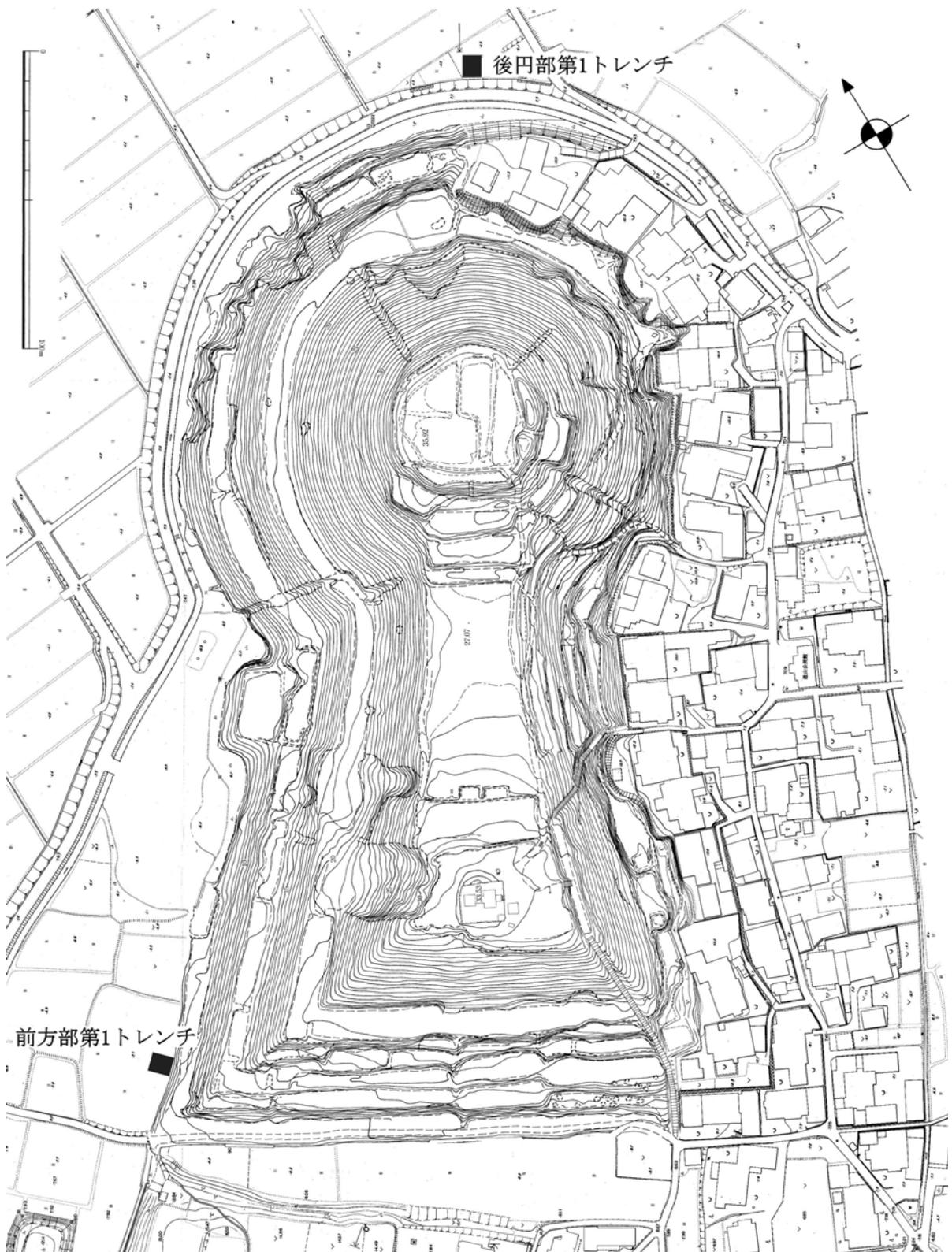
発掘調査に先だって、12月18日に後円部北側と前方部前面の民有地内でボーリング調査をおこない、層序の確認等をおこなった。またこの際に湧水がみられたため、安全面に配慮し、トレンチ壁には傾斜を大きくつけることとした。また2月23日にはGPSを用いた座標杭の設置とレベル移動をおこなった。

前方部第1トレンチは、前方部西側の墳丘裾に直交するラインに沿って設定し、2日から掘り下げを開始した。掘り下げにともない、湧水がみられたため、水抜きを兼ねて北壁沿いに先行トレンチを設けた。先行トレンチ内を掘り下げたところ墳丘側で地山を部分的に検出した。墳丘から離れた場所では、同じ標高で地山を確認できなかったため、墳丘から離れるにつれて地山が下がっていることが予想された。また新たに先行トレンチを南・西壁沿いに設けたため、コの字形の先行トレンチとなった。この際南壁で地山が墳丘から離れるにつれて下がっている様子が確認できた。その後、平面の掘り下げと先行トレンチの掘り下げを並行しておこなった。この際トレンチ北西隅の先行トレンチ内から木材が横位の状態で出土した。またこの先行トレンチを南へ拡張した際に、新たに木材が立位の状態で出土した。その後、西壁沿いの先行トレンチを拡張した際に、砂と粘土が交互に薄く堆積している様子や水が流れた痕跡がみられた。また平面的に掘り下げたところ地山に岩脈がみられたため、基盤層を確定することができた。その後、基盤層の全面検出をおこなったが、その際に墳丘側で溝状遺構が検出されている。また土層の堆積状況に関する認識に矛盾が生じていたため、最後に南壁を掘り窪め、土層の確認をおこなった。

後円部第1トレンチは、後円部北側で墳丘主軸に沿うように設定し、2日から掘り下げを開始した。掘り下げにともない、湧水がみられたため、水抜きを兼ねてトレンチ北東隅に先行トレンチを設けた。その後、西壁沿いにも先行トレンチを設けたが、その際人頭大から拳大の礫が多く検出された。掘り下げの結果、礫の集積範囲はトレンチの西半部のほぼ全面に広がることが分かった。またさらに掘り下げたところ、立位のものを含む多数の木材が出土した。調査の進展にともなって先行トレンチが水抜きの機能を果たさなくなったため、北・西壁沿いにL字状の先行トレンチを設けた。その後の掘り下げでトレンチ南西隅から被熱遺構を確認した。その後、被熱遺構の検出と並行して先行トレンチ内で地山検出をおこなった。また先述のL字状の先行トレンチに加えて、東・南壁沿いに先行トレンチを設けた。最後に地山直上の層から地山にかけて木材が複数出土した。

両トレンチとも3月29日から30日に埋め戻しをおこない、31日に撤収を完了し、調査を終了した。

今年度は、3月20日に地元対象、翌21日に一般対象の現地説明会をおこなった。またインターネットを通じて調査の経過およびその成果を随時紹介し、資料の公開をおこなっている。



第1図 造山古墳トレンチ位置図 (S=1/2000)

2. 前方部第1トレンチ（第2図～第5図、第1表、図版1）

（1）トレンチの概要

本調査区では、古墳の周濠の有無の確認と、古墳築造年代の指標となる埴輪の検出を目的として、前方部西側の墳丘裾に長軸が直交するように南北6m、東西7mの規模で調査区を設けた。

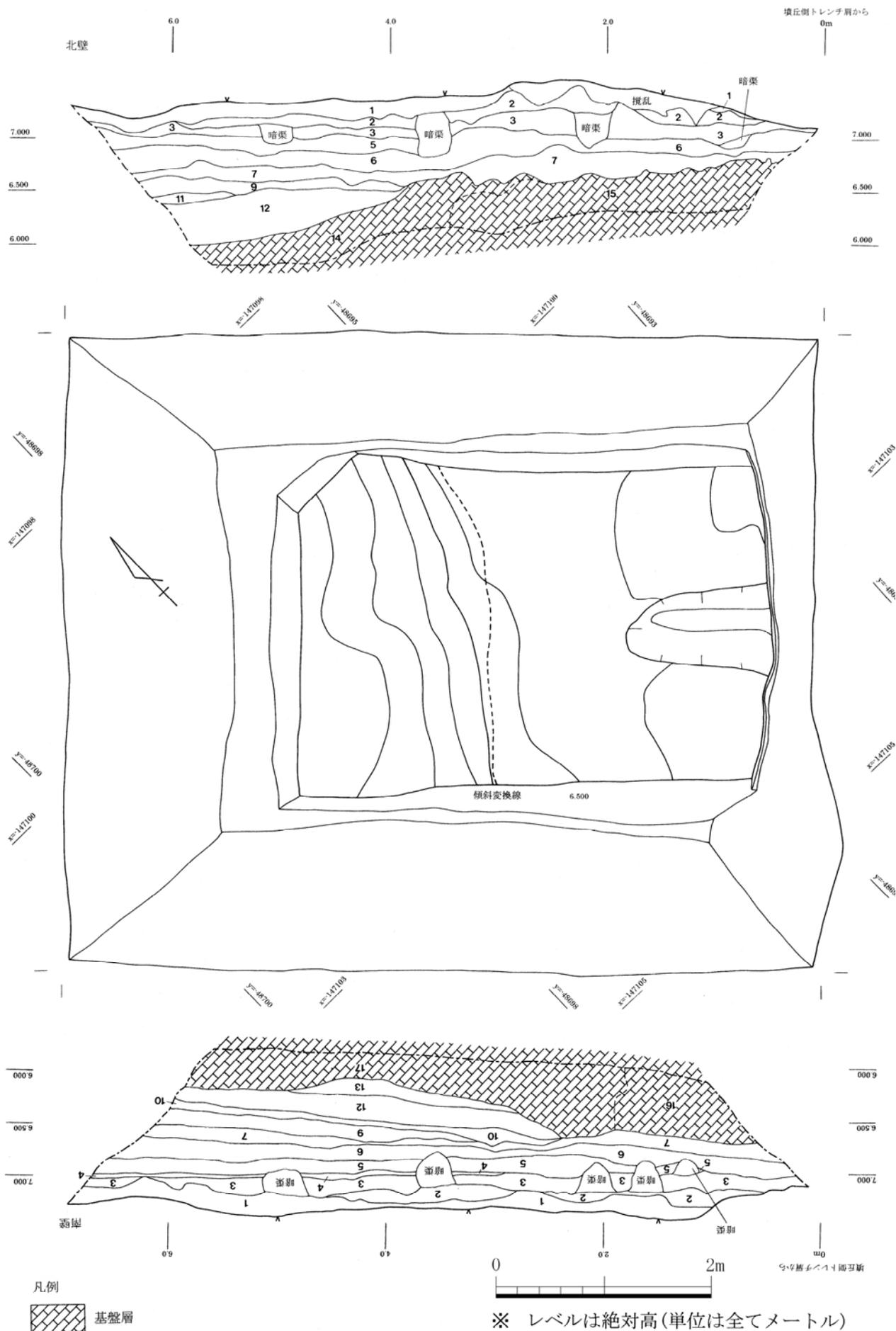
土層の堆積状況を検討しつつ掘り下げをおこなった結果、調査区北東隅の標高約6.7mで白色混橙色の風化花崗岩からなる層を確認した。この層は北壁側では墳丘側から約3.5mより西側はグライ化した状態で確認された。調査区中央からは土質が変わり、南東隅は灰白色砂質土、南西側は青灰色砂質土になる。土質や色調は数種類あるが、岩脈がみられたことからいずれも基盤層と考えられる。標高は調査区の墳丘側から西に向かって下がっていき、南壁では墳丘側から約2.4m、北壁では墳丘側から約3.8mで傾斜がやや急になる。また傾斜変換線より墳丘側の基盤層直上の層(7層)では、比較的多量の埴輪片が出土した。

また、南壁で検討を行った結果、少なくとも2回の改変を受けていることがわかった。1回目の改変で基盤層上面が削りとられ、そこに9層から13層が堆積している。これらの層はほぼ水平に堆積しており、堆積時に水の影響があったと考えられる。またこれらの層には遺物等は全く含まれない。さらに基盤層および9・10層を、標高約6.7mで削りとるような2回目の改変があり、その上に7層が堆積している。この7層には埴輪片の他、主に中世のものと考えられる土器片が含まれていたため、7層は中世に堆積した層と考えられる。以上のことから、古墳時代の面は中世頃に改変を受けていると推測される。

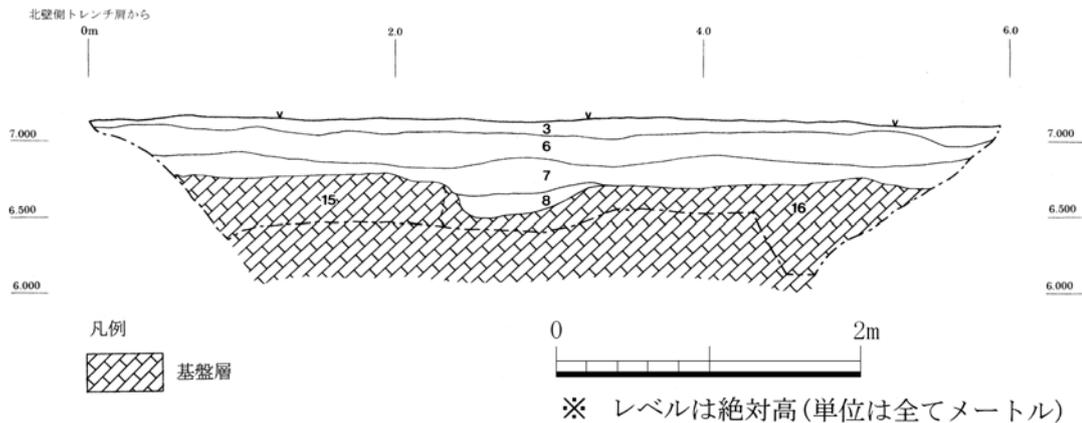
調査区の東壁際では基盤層を掘りこむかたちで、溝状遺構が確認された。この遺構は長さ約1m、幅約70cm、深さ約16cmで、遺構内埋土からは埴輪片が出土したため、古墳時代以降に形成された可能性が高い。

出土遺物としては、埴輪片約500点、土器片約50点、木材2点が出土している。埴輪片は主に6層から8層にかけて検出されている。その大半は円筒埴輪で占められるが、蓋形埴輪などの形象埴輪も数点出土した。土器片は中世を主とした古墳時代より後の時代のもので、主に6層から7層にかけて出土した。木材はトレンチ北西隅で出土した。1点が基盤層の約5cm上(12層中)で横位、1点が9層から12層にかけて立位の状態で出土した。木材はいずれも良好な状態で残存しており、横位で出土した1点には加工痕がみられる。

今回の調査では調査区内全面で基盤層を検出したが、この範囲で周濠が存在した痕跡を確認することはできなかった。しかし、今回得られた多量の埴輪片は、築造年代を考えていく上での参考になると考えられる。また、杭状の木材に関しては後円部第1トレンチでも類似した木材が検出されたため、今後より詳細な検討をおこなう必要がある。



第2図 前方部第1トレンチ平面図・断面図 (S=1/50)



第3図 前方部第1トレンチ東壁断面図 (S=1/50)

第1表 前方部第1トレンチ土層註記

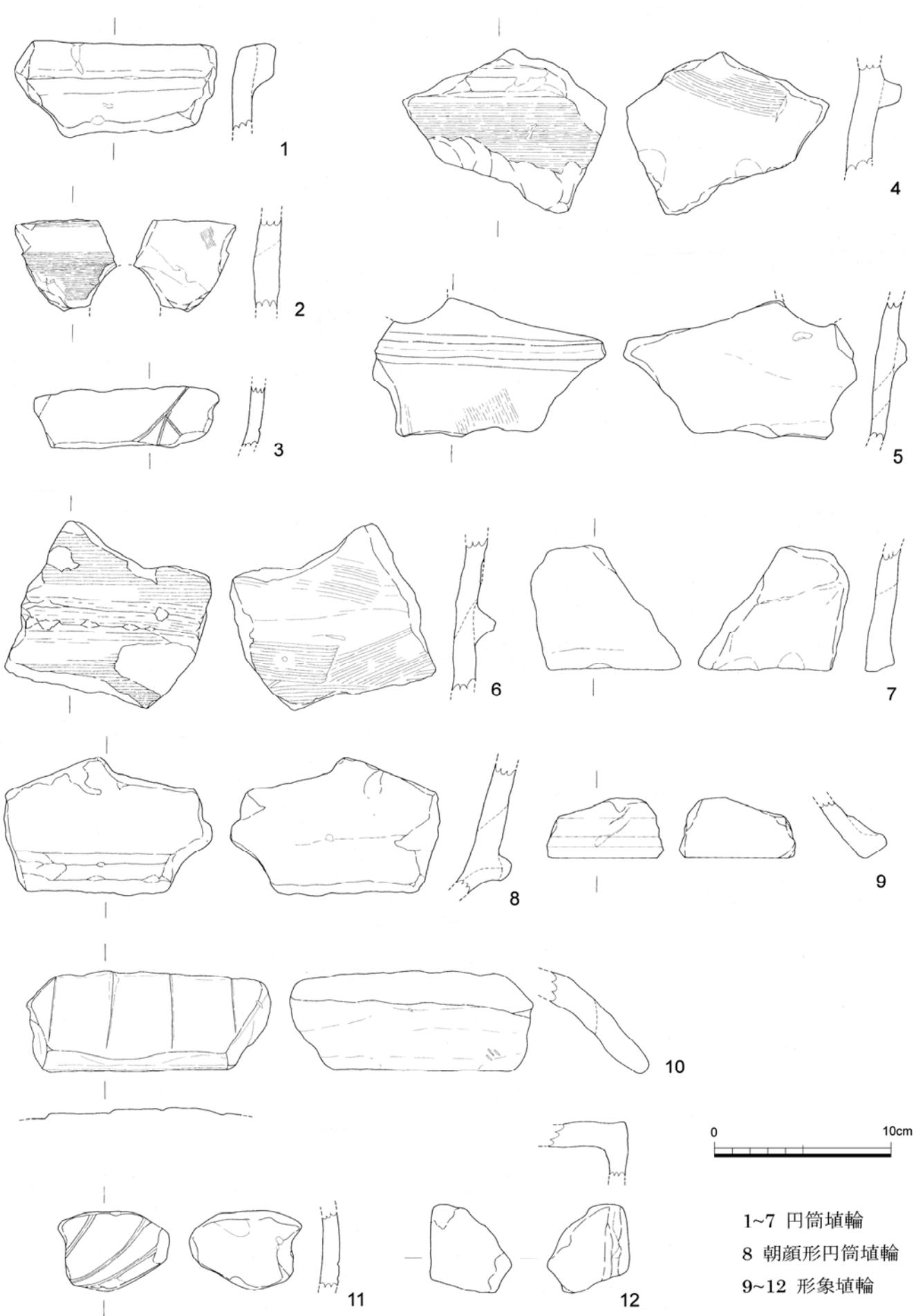
層番号	層名	属性	しまり	粘性	備考	土層マンセル記号
1	暗黒褐色土層	耕作土	弱い	弱い	北壁では攪乱有り。暗渠有り。	10YR 3/3
2	明褐色土層	耕作土	弱い	弱い	暗渠有り。	10YR 4/3
3	橙色混じり暗灰色粘質土層	堆積土	やや強い	強い	3~5mm 大の橙色の粒子をまばらに含む。	N 5/0
4	黒色混じり明黄褐色粘質土層	堆積土	非常に強い	やや強い	3~5mm 大の黒色の粒子をまばらに含む。	10YR7/6
5	橙色混じり明黄褐色粘質土層	堆積土	やや強い	やや強い	3~5mm 大の橙色の粒子をまばらに含む。	10YR 7/6
6	橙色混じり青灰色粘質土層	堆積土	やや強い	強い	5~10mm 大の橙色の粒子をまばらに含む。埴輪片を含む。	5B 5/1
7	灰色粘質土層	堆積土	強い	強い	0.5~1.5mm 大の橙色の粒子をまれに含む。埴輪片・土器片を多量に含む。	7.5Y 5/1
8	橙色混じりにぶい黄橙色粘質土層	埋土	やや弱い	強い	掘り込み埋土。埴輪片を含む。	10YR 6/3
9	橙色混じり明青灰色砂質土層	流土	やや弱い	やや弱い	1~6mm 大の橙色の粒子をまばらに含む。こぶし大の白色の風化礫をまばらに含む。	5G 6/1
10	橙色混じり白色砂質土層	流土	弱い	弱い	3~5mm 大の橙色の粒子をまばらに含む。	2.5GY 7/1
11	橙色混じり青灰色砂質土層	流土	やや弱い	やや弱い	厚さ1~2cm 程度の粘土を帯状に含む。	5BG 6/1
12	橙色混じり暗青灰色砂質土層	流土	弱い	弱い	10~30mm 大の橙色の粒子を帯状に含むが、北壁から南壁にいくにつれて密になっていく。厚さ1cm 程度の粘土を帯状に含む。	5BG 5/1
13	赤褐色混じり暗青灰色砂質土層	流土	弱い	非常に弱い	南壁では赤褐色の粒子を極めて密に含む。西壁では3~5mm 大の赤褐色の粒子をまばらに含む。砂粒が粗い。	5B 4/1
14	白色混じり暗青灰色砂質土層	基盤層	弱い	やや弱い	風化花崗岩からなる。岩脈の粘土を含む。	5B 4/1
15	白色混じり黄橙色砂質土層	基盤層	弱い	やや弱い	風化花崗岩からなる。岩脈の粘土を含む。	7.5YR 7/8
16	灰白色砂質土層	基盤層	強い	やや弱い	砂質土、粘土が混ざる。3~5mm 大の黒色・橙色・褐色のブロックをまばらに含む。	5Y 7/2
17	青灰色砂質土層	基盤層	やや弱い	弱い	風化花崗岩をブロック状に含む。1mm~20mm の白色風化礫をまばらに含む。	5B 5/1

(2) 出土遺物

a. 埴輪 (第4図)

今回の調査では、約 500 点の埴輪片が出土した。いずれも小片で、全形を復元できる資料はない。現在のところ、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が確認でき、円筒埴輪片が大半を占める。このうち 12 点を図化した。

円筒埴輪の外表面調整は、一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ、指によるナデがみられる。内表面調整はタテハケ、ヨコハケ、ナナメハケ、指によるナデがみられる。外表面に線刻が施されているものも出土している(3)。突帯の形状は、断面形が台形や「M」字状を呈するものがある。確認できる透かし孔はすべて円形である。器壁の厚みは、胴部で 0.8~2.4cm、基底部で 1.0~1.4cm をはかり、全体的に薄手のものが多い。その他、口縁部突帯をもつものも確認されている(1)。これは造山古墳周辺の古墳で見られるほか、畿内での出土例が多く、畿内との関係を推測できる資料である。8 は朝顔形円筒埴輪の口縁部であるが、表面の摩滅が激しく、調整は確認できない。器



1~7 円筒埴輪
 8 朝顔形円筒埴輪
 9~12 形象埴輪

第4図 前方部第1トレンチ出土埴輪 (S=1/3)

壁の厚みは 1.0~1.7cm をはかり、表面に黒斑が見られる。突帯の形状は台形を呈する。

円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪の焼成は、あまいものから良好なものまで質に幅がある。また有黒斑のものと無黒斑のものが確認でき、野焼きの埴輪と窖窯焼成の埴輪が混在している様子が確認できる。

形象埴輪では蓋形埴輪の笠部と思われる埴輪片が出土しており、浮き彫り状の段差が確認できるものもある(10)。また線刻が施されているもの(11)や、端部の一部と思われるもの(12)も出土しているが、いずれも小片であるため詳細は不明である。焼成はややあまいものから良好なものまでである。

今回出土の資料は外面調整ヨコハケが出現する川西編年Ⅲ期の特徴を示すが、焼成法が窖窯焼成に変わる新しい段階の埴輪片も散見される。以上のことから、埴輪の時期については5世紀前半頃と考えられる。

【参考文献】

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会

b. 後世の土器 (第5図)

今回の調査では、約 50 点の土器片が出土しており、大部分が7層からの出土である。いずれも小片であり、全形を復元できる資料はなかった。このうち土師質碗の底部片4点を図化した。

1、2、3、4全て高台をもつ吉備系土師質碗である。1は高台径 6.0cm を測る。灰白色を呈し、焼成はあまく、胎土はやや粗い。また、摩滅が激しい。2は高台径 5.6cm を測る。黄褐色混じりの灰白色を呈し、焼成はあまく、胎土はやや粗い。3は高台径 5.6cm を測る。灰白色を呈し、焼成はあまく、胎土はやや粗い。これもまた、摩滅が激しい。4は高台径 6.0cm を測る。浅黄燈色を呈し、焼成は良好で、胎土は精良である。

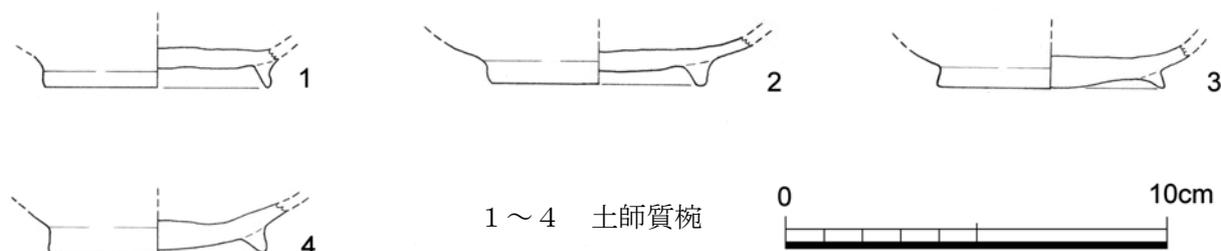
出土した4点の高台径は総じて 5.6~6.0cm とさほど大きくないため、碗の法量はやや小さいものであったと推測できる。高台に関しては、1・2は高台端部がやや丸みをおびていることから、つくりが簡略化していることがわかる。3・4になると高台が扁平化しており、前述の2点よりも簡略化がさらに進んでいることがわかる。これらの特徴から、1・2は13世紀後半から14世紀初頭、3・4は14世紀前半から14世紀中葉頃のものであると考えられる。

【参考文献】

鈴木康之 1995「土師質土器碗」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」松木武彦編『鹿田遺跡3』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊)岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

付記 これらの遺物に関して、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター山本悦世氏にご教示いただいた。



第5図 前方部第1トレンチ出土中世土器 (S=1/2)

3. 後円部第1トレンチ（第6図～第15図、第2表・第3表、図版2）

（1）トレンチの概要

本調査区では、古墳の周濠の確認を目的として、後円部北側に調査区を設定した。調査区は西壁を古墳の墳丘主軸に沿わせるように南北5.5m、東西6mの規模で設定したが、南西隅の角には排水用の溝が走っていたためトレンチを屈折させるかたちとなった。

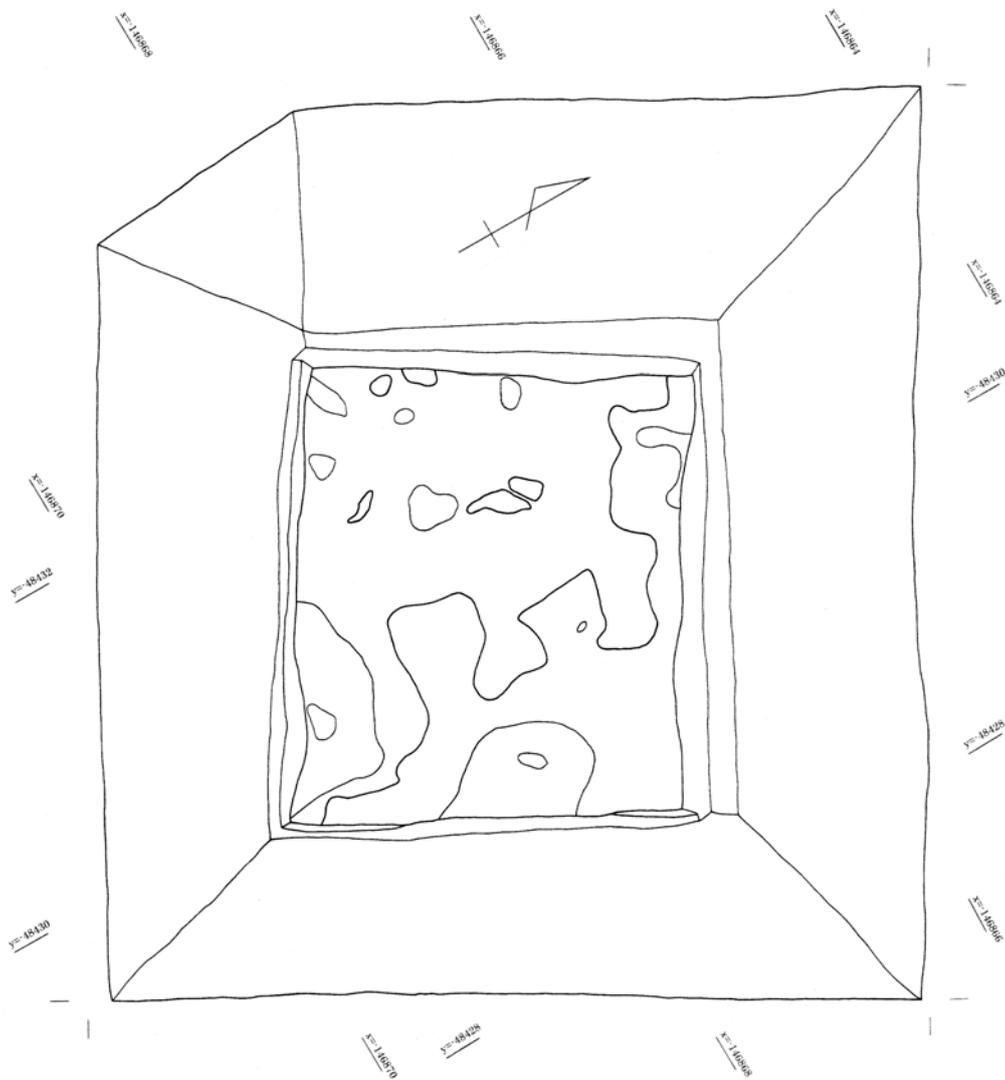
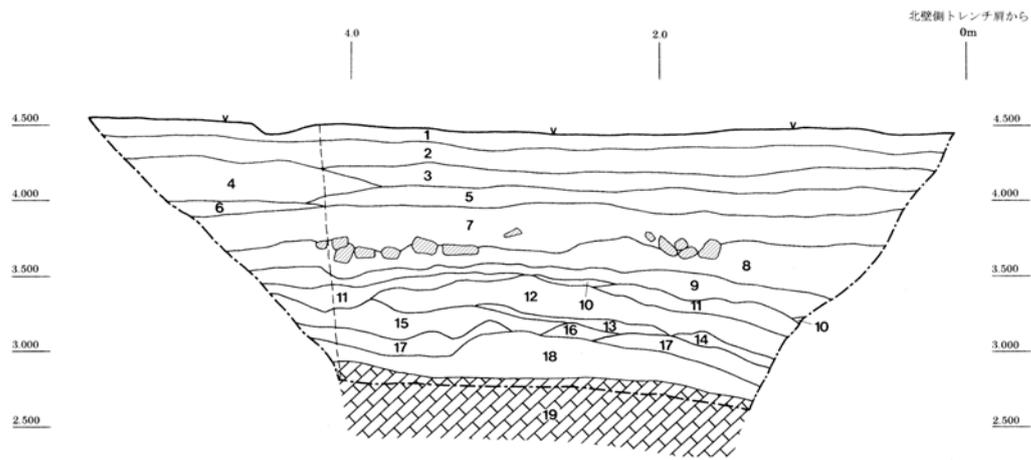
土層の堆積状況を検討しつつ掘り下げをおこなった結果、調査区西半の8層上面において礫の集積を確認した。これらの礫は人頭大から拳大ほどの大きさであり、葺石として用いられていたものが転落したか、あるいは人為的に投棄されたものと考えられる。礫の集積が確認された8層からは埴輪片および中世土器片が出土していることから、これらの礫は中世に集積したと考えられる。

また、11層上面から木材が多数検出された。木材は主に調査区の東半部に集中し、大半は横位であったが、2点が9層から11層にかけて立位で検出された。立位のものには先端が尖ったものもある。木材が出土した11層より下層からは弥生土器片が多数出土している。加えて地山直上の18層からも木材が数点出土した。こちらも大半は横位であったが、2点が17層から19層にかけて立位で検出された。立位のものには加工痕が認められるものもあった。

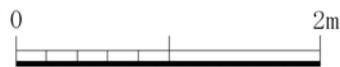
調査区の南側では17層において被熱遺構を直径約1.5mの範囲で確認した。被熱遺構ではピットが2カ所確認されており、ピット内埋土から弥生土器片が1点出土している。

出土遺物としては、埴輪片約300点、中世土器片約150点、弥生土器片約300点、礫約280点、木材約100点が出土している。埴輪は3層から9層にかけて出土しており、器種は円筒埴輪や朝顔形埴輪が大半を占め、蓋形埴輪などの形象埴輪も数点確認されている。中世土器は7層と8層から出土しており、瓦質のすり鉢や備前焼の壺などが確認されている。弥生土器は9層から18層にかけて出土しており、器種は高杯や甕などが確認されている。礫と木材は先述のとおりである。

今回の調査では古墳時代のものと断定できる土層が確認できなかったため、周濠の有無については明確な結論を出すことはできなかった。これは、中世以降に古墳時代の土層が削平されたことが原因と考えられる。しかし、礫や木材が検出されたことは今後の検討を進めていく上で大きな成果であったといえる。



凡例
 地山

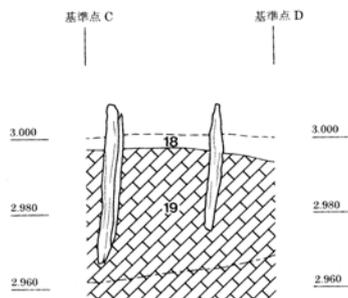


※ レベルは絶対高(単位は全てメートル)

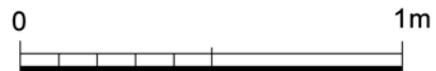
第6図 後円部第1トレンチ平面図・断面図 (S=1/50)



※ * 2…第 15 図-2

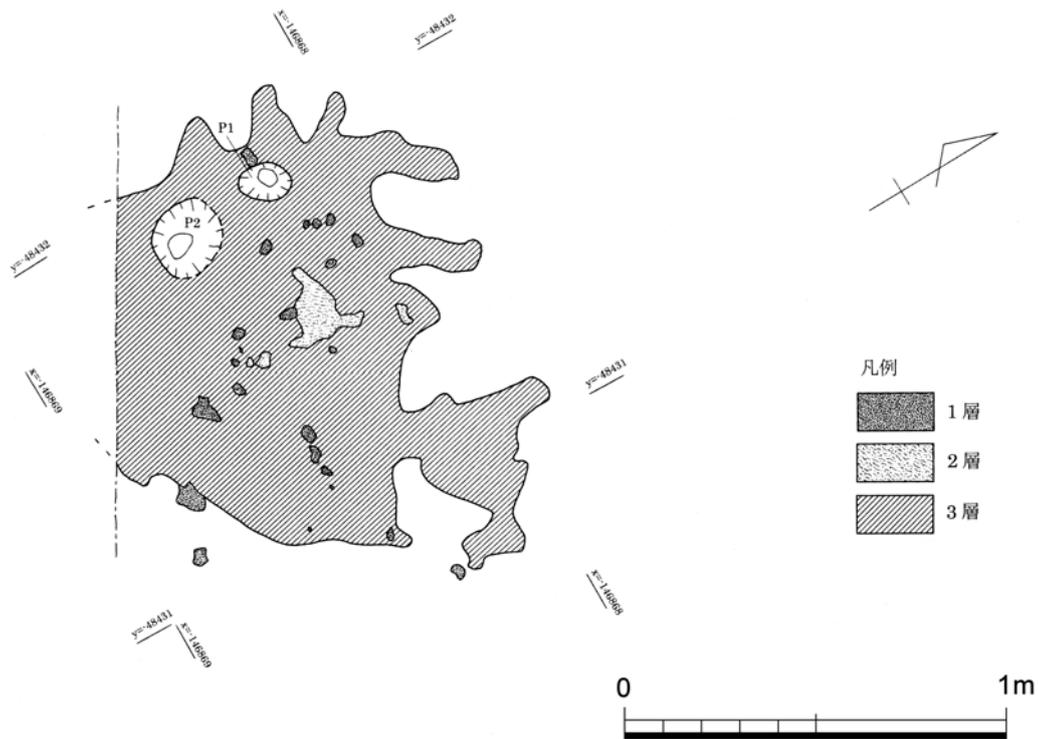


凡例
 地山



※ レベルは絶対高(単位は全てメートル)

第 8 図 後円部第 1 トレンチ木材出土状況図・木材立面図(下層)(S=1/20)



第9図 後円部第1トレンチ被熱遺構平面図 (S=1/20)

第2表 後円部第1トレンチ土層註記

層番号	層名	属性	しまり	粘性	備考	土層マンセル記号
1	暗黒褐色土層	耕作土	やや強い	やや弱い	3~5mm 大の白色・橙色の粒子をやや密に含む。	5YR 2/1
2	明褐色土層	耕作土	やや強い	非常に弱い	2~5mm 大の白色・橙色の粒子をやや密に含む。	5YR 3/1
3	灰色粘土混じり明褐色土層	堆積土	強い	非常に弱い	1~3mm 大の白色の粒子をまれに含む。	10YR7/6
4	橙色混じり暗灰色粘質土層	堆積土	強い	やや強い	1~3mm 大の白色の粒子をまばらに含む。	N5
5	灰色粘土混じり暗褐色土層	堆積土	強い	弱い	2~5mm 大の白色・橙色の粒子を密に含む。	7.5YR 5/4
6	橙色混じり明灰色粘質土層	堆積土	強い	やや強い	1~5mm 大の白色の粒子を密に含む。黄色・灰色のブロックをやや密に含む。	7.5Y4/1
7	橙色混じり淡灰色粘質土層	堆積土	やや強い	強い	3~5mm 大の白色・橙色の粒子をやや密に含む。	10YR 5/1
8	黒色混じり暗灰色粘質土層	堆積土	強い	非常に強い	1~3mm 大の白色の粒子をまれに含む。	N3
9	黒色混じり明灰色粘質土層	堆積土	強い	非常に強い	1~3mm 大の白色の粒子をまれに含む。	N6
10	濃黒色粘質土層	堆積土	やや強い	やや強い	1~2mm 大の白色の粒子をまれに含む。	N2
11	灰褐色砂質土層	堆積土	やや強い	弱い	1~5mm 大の白色・橙色の粒子をまばらに含む。	2.5Y 6/1
12	橙色混じり黒色粘質土層	堆積土	やや弱い	やや強い	1~3mm 大の白色の粒子をまれに含む。	N4
13	橙色混じり灰色砂質土層	堆積土	やや強い	やや弱い	1~2mm 大の白色の粒子をやや密に含む。	10YR5/1
14	灰色砂質土層	堆積土	弱い	やや弱い	1~3mm 大の白色・橙色の粒子をまばらに含む。	2.5Y 4/1
15	明黒色粘質土層	堆積土	強い	強い	1~2mm 大の白色の粒子をまれに含む。	10BG 1/2
16	黒色混じり灰色砂質土層	堆積土	やや強い	弱い	1~2mm 大の白色の粒子をまばらに含む。	2.5Y 6/1
17	暗黒色粘質土層	堆積土	やや弱い	強い	1~3mm 大の白色の粒子をまれに含む。	5B 5/1
18	橙色混じり白灰色粘質土層	堆積土	やや強い	やや強い	1~3mm 大の白色の粒子をまばらに含む。	N7
19	黄褐色砂質土層	地山	非常に強い	やや弱い	1~3mm 大の白色の粒子をごくまれに含む。	10YR5/6

第3表 後円部第1トレンチ被熱遺構土層註記

層番号	層名	属性	しまり	粘性	備考	土層マンセル記号
1	淡橙色粘質土層	焼土	やや強い	やや強い	3層中にブロック状に入る。濃橙色の粒子をごくまれに含む。	-
2	濃橙色混じり灰褐色粘質土層	焼土	やや強い	強い	濃橙色の粒子を密に含む。	-
3	褐色混じり黒色土層	焼土	強い	やや強い	白色・淡橙色・濃橙色の粒子をやや密に含む。	-

(2) 出土遺物

a. 埴輪 (第10図、第11図)

今回の調査では約300点の埴輪片が出土している。いずれも小片で全形を窺いうる資料はない。現在までのところ、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪を確認しており、円筒埴輪が大半を占める。このうち11点を図化した。

円筒埴輪の外表面調整は一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ、ナナメハケ、指によるナデがみられる。内面調整はタテハケ、ヨコハケ、ナナメハケ、指によるナデがみられる。突帯の形状は、断面形が台形や「M」字状を呈するものがある。2では円形の透孔が見られる。また、1は口縁部突帯を持ち、畿内の古墳ほか、主に造山古墳周辺で類例が確認されており、限定して生産された形態の埴輪であると考えられる。今回出土した円筒埴輪片を概観すると、器壁の厚みは口縁部突帯で2.0~2.1cm、基底部で1.5~1.95cm、その他の部位で0.9~2.2cmである。

朝顔形円筒埴輪片の外表面調整は一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ、ナナメハケ、指によるナデが、内面調整はタテハケ、ナナメハケ、指によるナデが見られる。中には、突帯が確認できるものもあり、突帯の形状は断面形が台形や「M」字状を呈するものがある。8には外面に赤色顔料の付着が確認できる。今回出土した朝顔形円筒埴輪を概観すると、器壁の厚みは0.8~2.4cmである。

今回出土した円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪共に焼成は良好である。また、有黒斑のものと無黒斑のものが確認でき、野焼きの埴輪と窖窯焼成の埴輪が混在しているものと考えられる。

10は、蓋形埴輪の笠下半部であり、放射状の沈線を施すことにより貼布の表現を簡素にするという新しい段階の様子がみられる。また、外面に沈線の施された11は形象埴輪であるが、器種は不明である。

これらの点から、今回出土した資料は外面調整ヨコハケを持つ川西編年Ⅲ期の特徴と、焼成法が窖焼きになる新しい段階の様相もみられる。以上のことから、埴輪の時期は5世紀前半頃と考えられる。

【参考文献】

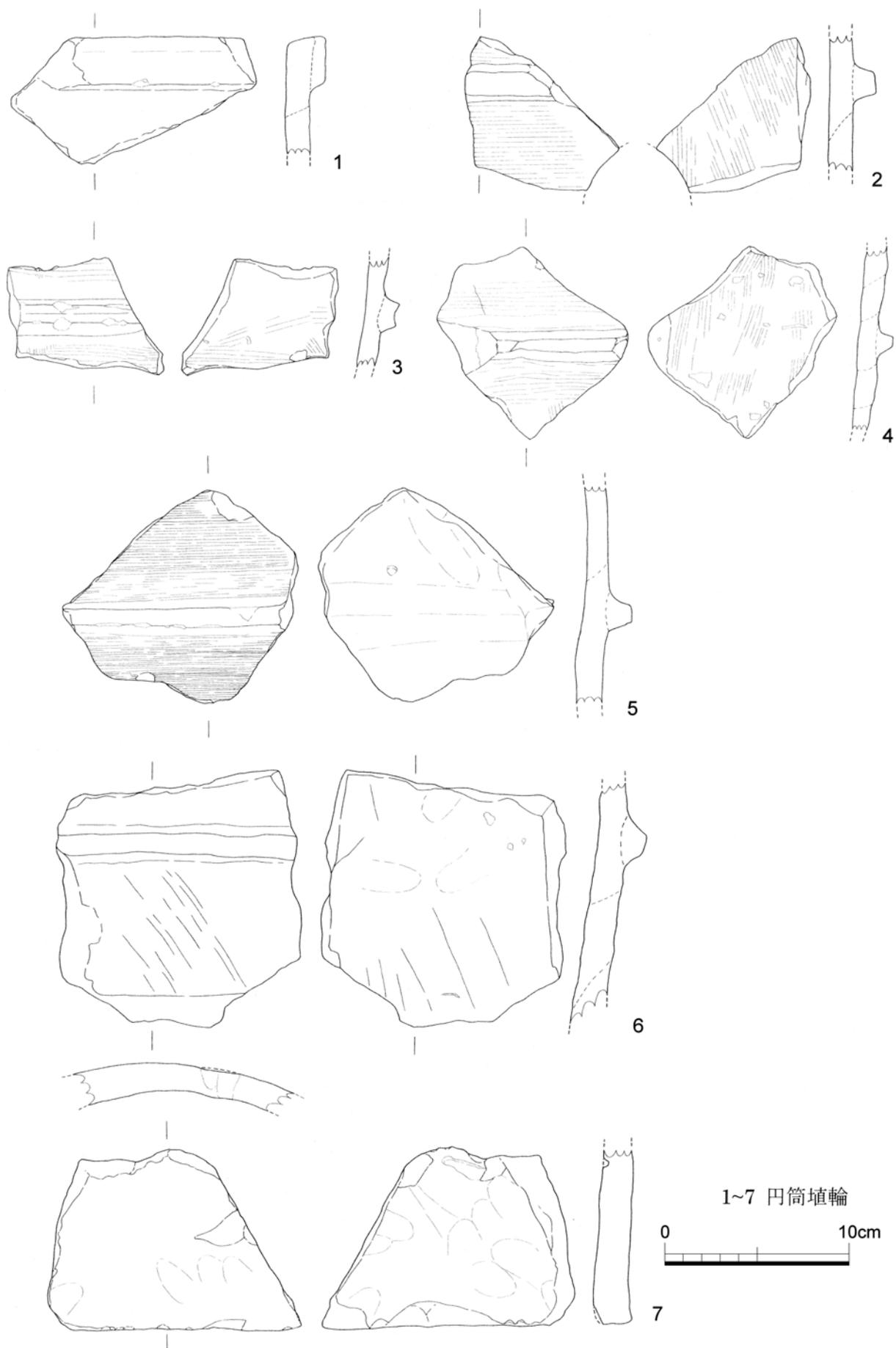
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会

b. 弥生土器 (第12図、第13図)

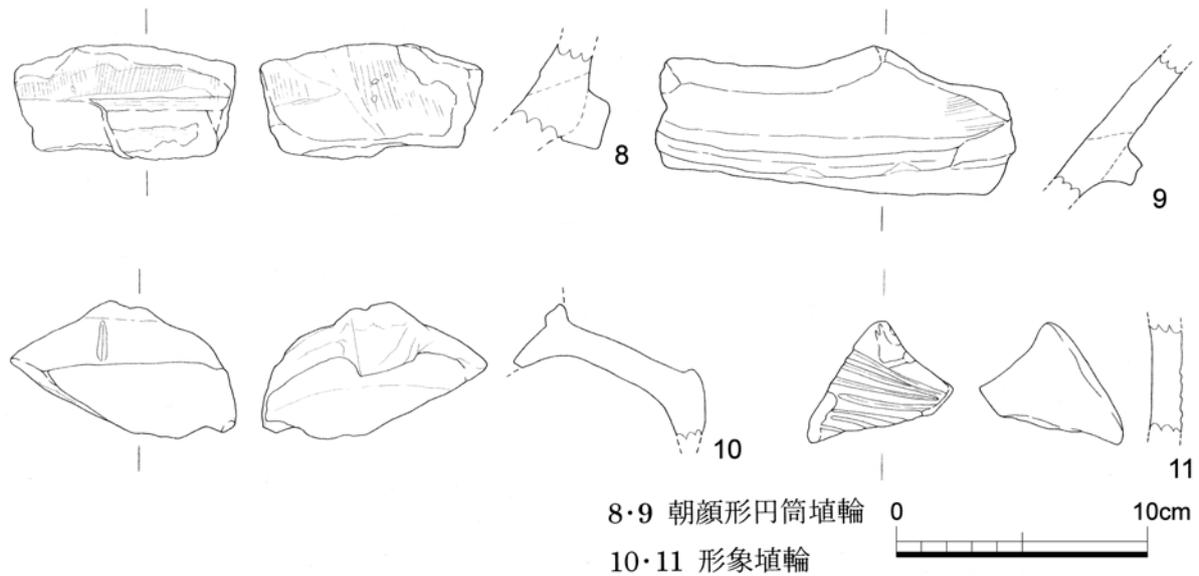
今回の調査において、後円部第1トレンチでは弥生土器片が約300点出土した。そのうち状態のよい25点を図化した。

1~7は甕の口縁部である。1は口縁端部に刻目が施され、口縁部から胴部へ移る部分にヘラ描き沈線文が施される。また内面には指圧痕がみられる。2は外面に3条の沈線が施されている。3は口縁端部に幅の狭い刻目が施され、外面には現状で6条の沈線がみられる。4は口縁部外端面に凹線文が施されており、頸部には指頭圧痕突帯をめぐらせている。5、6は口縁部断面が「T」字状になっており、口縁部外端面に凹線文が施されている。5の外面には縦方向のヘラミガキが施され、内外面の一部に赤色顔料が付着している。7は口縁部外端面に凹線文を施し、内面には指圧痕がみられる。8は甕の胴部である。外面には4条の沈線の間列点文が施されている。

9~12は壺の口縁部である。9は口縁部外端面にナデが施されている。10は口縁部外端面に



第10図 後円部第1トレンチ出土埴輪(1) (S=1/3)



第11図 後円部第1トレンチ出土埴輪(2) (S=1/3)

凹線文が施されており、胎土は灰白色である。11は口縁部外端面にナデが施され、胎土は赤橙色である。12は口縁部が「く」の字状になっており、内面にはハケメがみられる。13は壺の胴部で、指頭圧痕文突帯がみられる。

14～17は甕もしくは壺の底部である。14は底部穿孔土器であり、焼成前に穿孔されたものである。17は胎土に粗い砂粒を多く含んでいる。

18～21は高杯の脚部である。18は脚裾上部に円孔がみられ、磨滅によって明瞭でないが脚基部にナデが施されている。19は脚裾部下端にナデが施されている。20は脚部に多数の円孔がみられ、脚部下端に凹線文が施されている。21は裾部に放射状の文様がみられ、ヘラ描き沈線文が施されている。

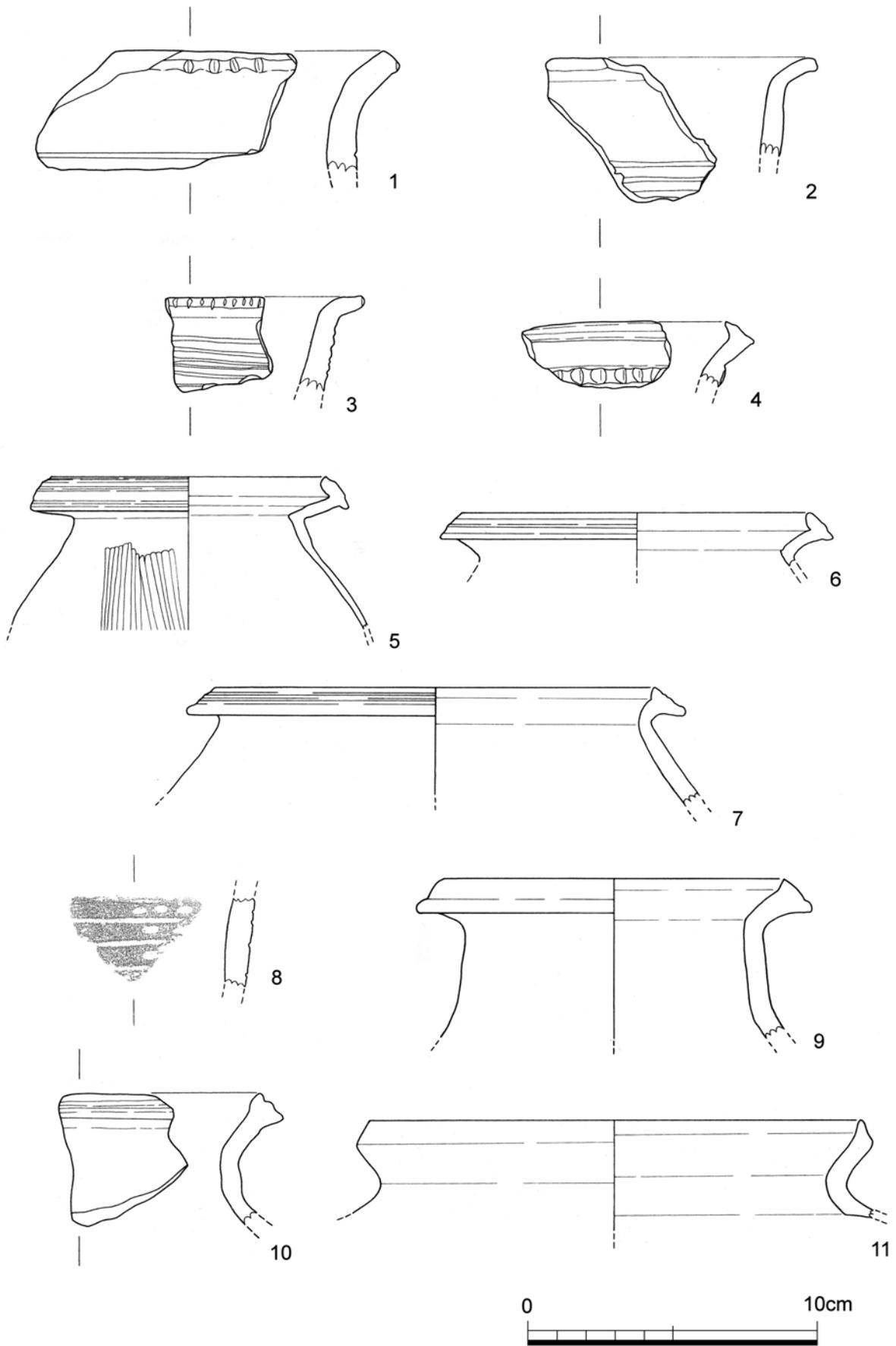
22は平底の小型鉢形土器であり、口縁部が「ハ」の字状に開く。23は製塩土器の台脚部である。外面はナデによって調整され、内面にはシボリ目がみられる。

また、紡錘形の管状土錘が2点出土している。24は外面にケズリがみられる。

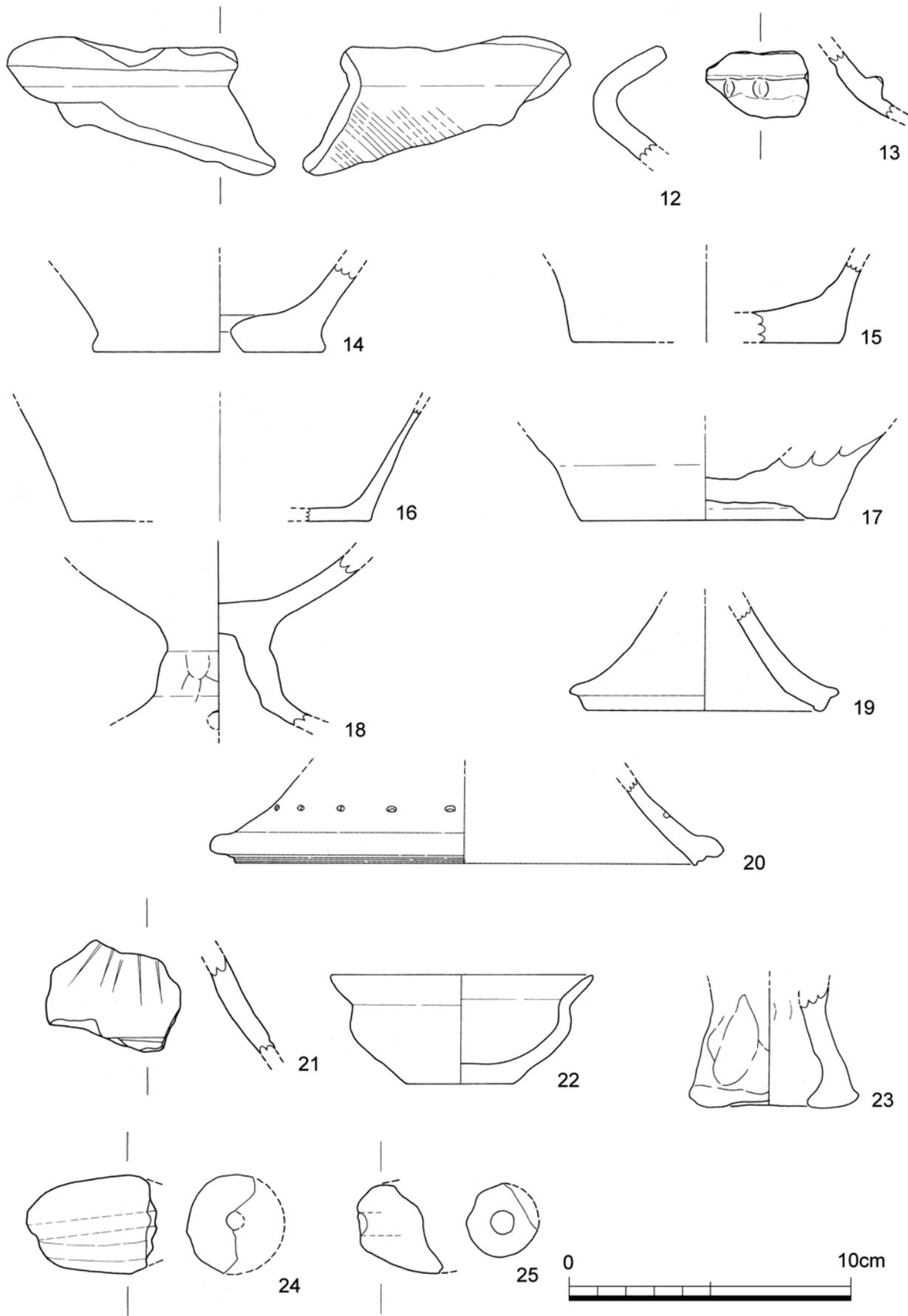
今回出土した土器のうち、時期を同定できたものについては、1～4・13が弥生前期中葉（高橋編年Ⅱ期）、5～11・18～21が弥生中期後葉～後期中葉（同Ⅴ～Ⅷ期）、12・22が弥生末期（同Ⅹ期）に分けられる。弥生中期後葉から後期中葉のものが中心をなしている。

【参考文献】

- 金関恕・佐原真 1985「道具と技術Ⅰ」『弥生文化の研究』第5巻 雄山閣
- 近藤義郎 1994『日本土器製塩研究』青木書店
- 高橋護 1980「弥生土器—山陽1～4」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181号 ニュー・サイエンス社
- 正岡睦夫・松本岩雄 1992「備中」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社



第 12 図 後円部第 1 トレンチ出土弥生土器(1) (S=1/2)



第13図 後円部第1トレンチ出土弥生土器(2) (S=1/2)

c. 後世の土器（第 14 図）

今回の調査では古代以降の土器が約 150 点出土している。それらは 7・8 層からの出土である。このうち 7 点を図化した。

1 は土師質の小皿で、淡赤橙色を呈する。磨滅しているため明瞭ではないが、内面にはミガキが施されていたとみられる。底部は回転ヘラ切り技法で切り離されるほか、オサエが施されている。時期は不明である。2 は土師質の高台付椀の底部で、灰白色を呈する。高台は高さ 0.3cm ほどの粗雑なつくりで、断面は台形である。3 は土師質の椀で灰白色を呈し、口縁端部が丸く仕上げられている。また内面には線刻が施されている。2・3 はともに 14 世紀前半のものと考えられる。

4 は 15 世紀頃の亀山焼と考えられ、黄褐色を呈する。外面に粗大な格子目タタキが施され、内面にはハケメ調整が施される。5 は備前焼の壺で、赤褐色を呈する。口縁端部が丸く折り曲げられた玉縁状を呈しており、15 世紀から 16 世紀のものと考えられる。

6 は瓦質の鍋で、2 個の円孔を穿つ内耳を持つ。口縁は上下方に拡張しており、強い横ナデが施されている。また外面と内面に横方向のハケ目がみられるほか、外面にはオサエが確認できる。時期は 15 世紀前後のものと考えられる。7・8 は瓦質の播鉢である。また 7 は外面にハケとオサエが確認できる。いずれも 9 条を単位とした卸し目が見られ、15 世紀前半から後半のものと考えられる。8 は口縁が上下方に拡張している。また重ね焼きが行われていることが、口縁部から約 3 cm 以下の部分では炭素が付着せず灰白色を呈していることから確認できる。

今回出土した遺物は小片が多く時期・器種が不明なものが多いが、14 世紀から 15 世紀のものが中心を占めると考えられる。

【参考文献】

伊藤晃・西節雄編 1977『備前』（日本陶磁器全集 10）中央公論社

伊藤晃 1987「中世窯業生産」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館

鈴木康之 1995「IV 期後半の土器と草戸千軒の終末年代」岩本正二編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 IV』広島県教育委員会

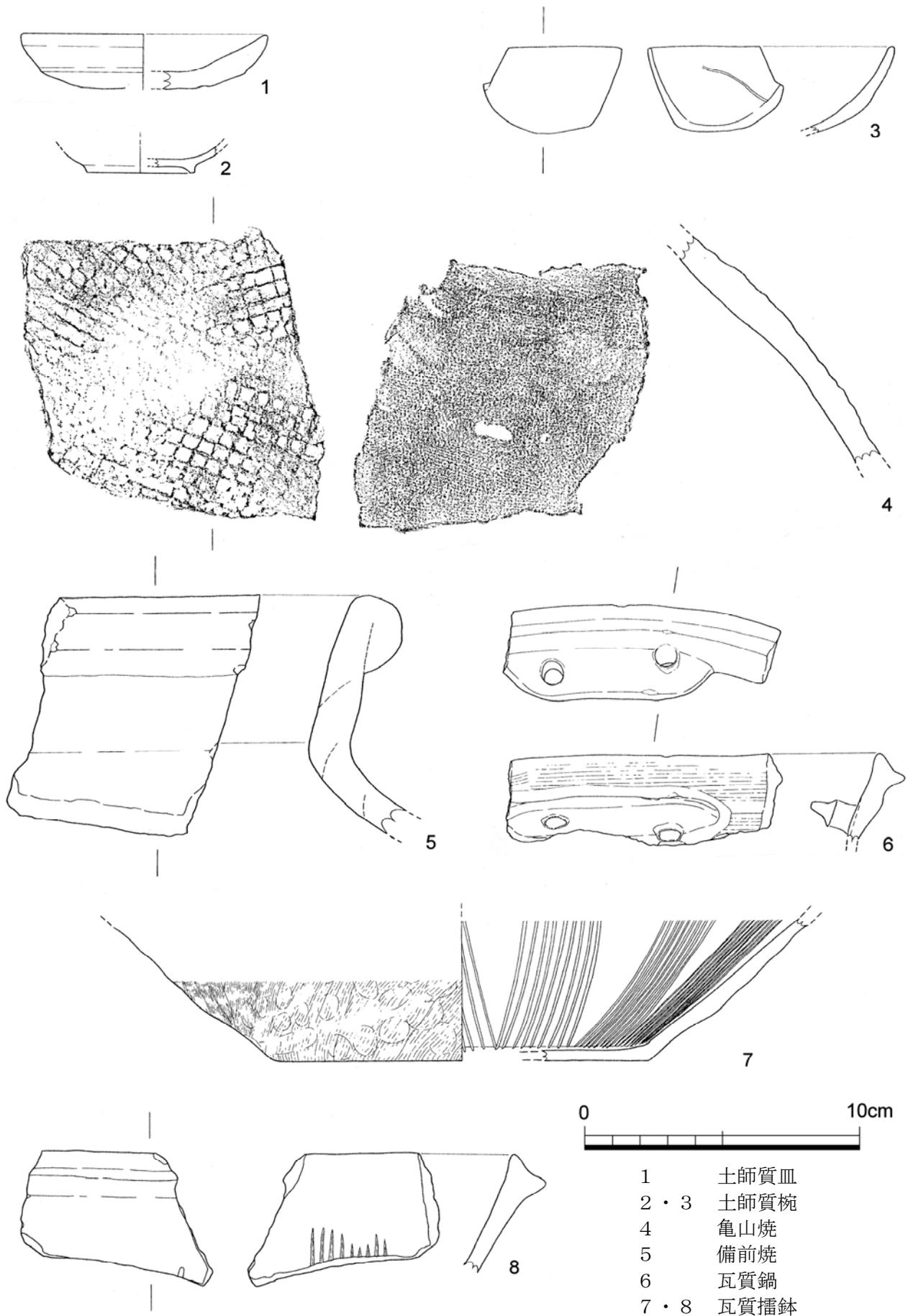
山本悦世 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」松木武彦編『鹿田遺跡 3』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 6 冊）岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

付記 これらの遺物に関して、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター山本悦世氏にご教示いただいた。

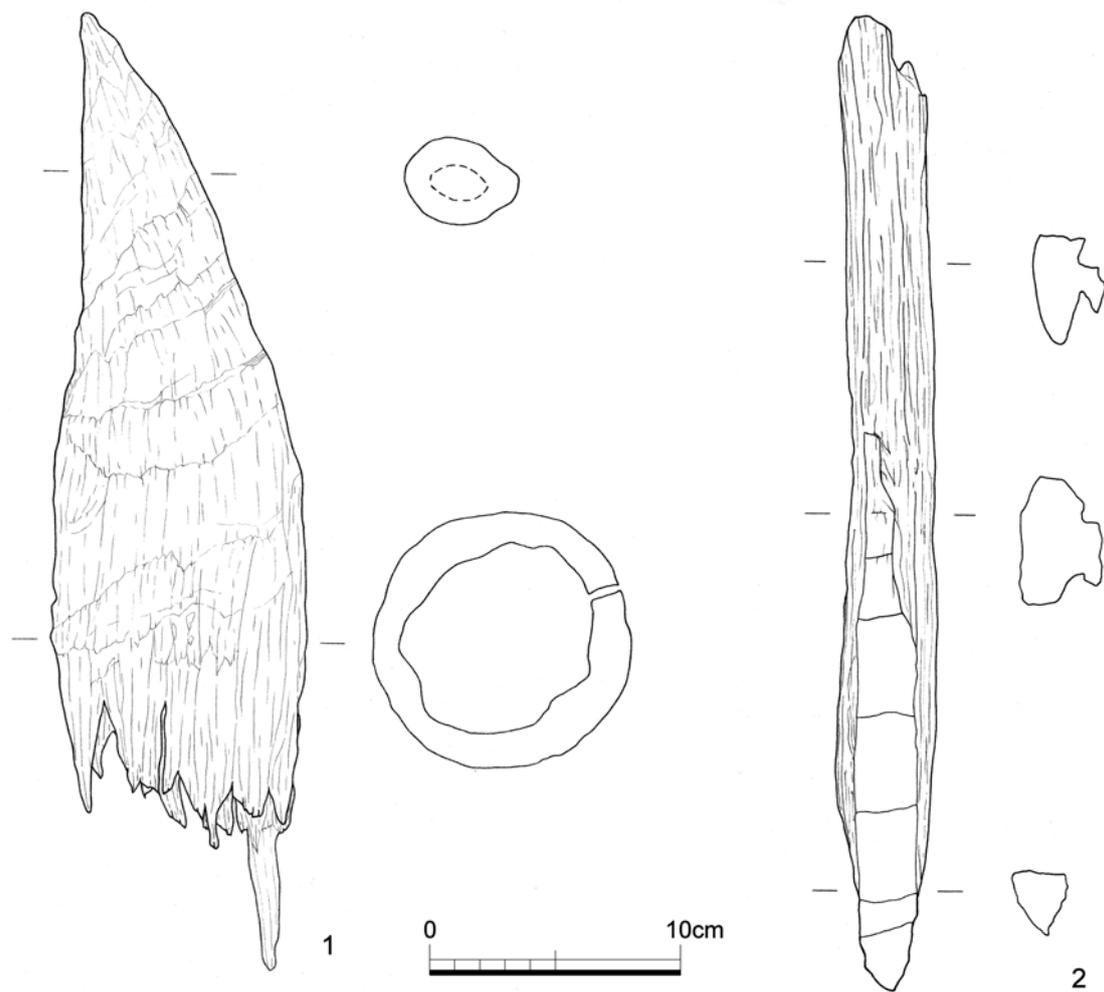
d. 木材（第 15 図）

今回の調査では木材は主に 11 層と 18 層から出土しており、それぞれから立位のを 1 点ずつ図化した。

1 は 9 層から 11 層にかけて立位で出土し、円錐形を呈している。現存長 37.0cm、最大径 9.6cm を測る。また、内部は腐朽により空洞になっている。なお加工痕等はみられない。2 は 17 層から地山(19 層)にかけて立位で出土した。現存長 37.5cm、幅 3.6cm、厚さ 5.1cm を測る。先端付近の一側面が人為的に平滑に整えられており、加工が 6 単位みられる。また、この面に黒色で幅 2 mm 程度の短い筋状の痕跡が軸に対して斜交するかたちで多数確認でき、ややくぼんだ形状を呈している。1 と 2 とともに用途は不明である。時期については、1 は不明であるが、2 は弥生時代のものである可能性が高い。



第14図 後円部第1トレンチ出土後世の土器 (S=1/2)



第 15 図 後円部第 1 トレンチ出土木材 (S=1/3)

結 語

第1次発掘調査の結果明らかになった点や課題は以下のとおりである。

1. 両トレンチとも、中世に大幅な改変を受けていることが明らかになった。13世紀から16世紀を中心とする土器が出土しており、比較的長期にわたる活動があったものと思われる。後円部第1トレンチでは、16世紀後半の高松城水攻めの時期に該当する遺物も一定数出土しているが、その時期に限定されるわけではない。
2. 造山古墳の築造等にかかわる土層はいずれのトレンチでも確認できなかった。中世の段階で大規模な削平を受けたものと思われる。削平の要因は耕地の拡大であろう。
3. 前方部第1トレンチの中世の層より下は、土器が出土していないので年代は明らかではないが、木材以外の遺物を含まず汚れもほとんどない。トレンチ全面で基盤層を確認しているので、周濠があったとしてもそれより上か外側にあたるものと思われる。
4. 後円部第1トレンチの中世より下は、弥生時代の土層となる。9層以下が弥生土器を含む層であり、周濠が存在していたとしても底が標高3.5mより上になり、浅いものであったことになる。
5. 後円部第1トレンチのデータから墳端が標高3.5mより上になることがわかったため、後円部1段目の傾斜から墳端の位置が推定できることとなった。その結果、墳丘の全長は350mに達しない可能性がでてきた。
6. 前方部第1トレンチで中世に大規模な削平が想定されたことから、「造山壇」とも呼ばれる基壇状の部分が本来の墳端の外側の平坦面である可能性がでてきた。
7. 後円部第1トレンチでは、弥生時代初期の突帯文段階の遺物が出土しており、この地域で農耕が開始された当初にすでに活動が及んでいたことが明らかになった。基盤となる汚れのない土層の上にあたかも踏み荒らしたような形で暗黒色の土層が堆積している。造山古墳の盛土の下に、弥生時代の生活の痕跡が残されている可能性がある。
8. 後円部第1トレンチでは、8層上面に多量の礫が残存していた。造山古墳後円部の中世城郭構築の時期ごろのものと思われる。礫は造山古墳の葺石とほぼ同じ組成であるが、やや質の悪いものが多いようである。
9. 墳丘の外側では中世の改変が大規模に行われていることがわかったため、今後の調査は墳端に近い部分を中心に進めていく必要があることが明らかになった。

a. 発掘区の位置（南から）



b. 完掘状況（東から）



c. 発掘区南壁（北から）





a. 発掘区の位置（西から）



b. 中世礫集積出土状況（北から）



c. 完掘状況（東から）

岡山市新庄下
造山古墳第 1 次発掘調査
概要報告

(整理中の資料につき引用はお控え下さい)

2009 年 7 月 13 日発行
岡山大学考古学研究室
